

教育研究所と Guido Ruffino Prize 受賞

山田憲一内科医院院長 山田憲一

2018年10月1日～5日ベルリンで開催されたヨーロッパ糖尿病学会（EASD）において山田憲一内科教育研究所室長の山田伊津子が第2回 Guido Ruffino Prize を受賞しました。この賞は必ずしも臨床医でなくても糖尿病教育に長年携わり、かつ新たな試みで患者教育に貢献し国際的な発表を継続的に行ってきた者に与えられます。10月2日のEASDのDiabetes Education StudyGroup（DESG）で山田伊津子が10分間の受賞スピーチ*を英語で行いました。

当院の教育研究所は2012年8月に仙台市の西公園を臨む場所に設立しました。東日本大震災の後、今まで実践してきた糖尿病臨床の中で学んできたことをまとめ、次の世代に何らかのかたちで繋げていくことを考えて立ち上げたものです。ここでは、医院スタッフや外部の医療従事者の勉強会、糖尿病患者会のミーティングや座談会、学術発表の資料作成やスカイプによる海外の医師達との意見交換などを行っています。

1991年に開業しましたが、糖尿病治療のアウトカムは患者の療養態度に大きく左右され医療側の望ましい治療プロセスと患者自身の行動変容にギャップがあります。このギャップを乗り越える方法を模索してきました。そこで1999年すでに外来診療に特化していたJoslin糖尿病センターを山田伊津子と共に訪れました。Joslinでは糖尿病教育プログラムが網羅され患者の力を引き出す工夫がなされていることに大変触発され、帰国後、山田伊津子が山田憲一内科医院企画室を立ち上げ、医院独自の教育プログラムをスタートさせました。Joslin糖尿病センター留学中のハーバード大学医学部准教授の服部正和先生と親しくなり、その後先生が中心となり企画したUSA-Japan Meeting on Diabetes Educationでは糖尿病教育に関する発表や討論を英語でする機会に恵まれました。これを契機に山田伊津子も私と共に海外の糖尿病学会や研究会に参加し発表することになります。

2006年6月にアメリカ糖尿病学会（ADA）にて「US Diabetes Conversation Maps」の講習会に参加しました。このMapsの日本語版作成の予定はないと説明されました。講習会の会場においてMapsの策定委員で米国糖尿病教育看護学会の中心的メンバーのLinda Siminerio教授（後の2009年モントリオールでの国際糖尿病学会（IDF）会長）に相談したところ、独自のマップを作るようにアドバイスを受けました。そこで、医院独自のA3サイズ（ラミネート加工）の1枚の糖尿病対話マップを作成しました（2006年8月山田伊津子創出）。US Conversation Mapsは畳の大きさの5枚組であり、糖尿病自己管理の知識や技術の習得に重点を置いているのに対し、当院の糖尿病対話マップは「患者自身が自分の言葉で自分の糖尿病について語る」ための患者－医療者間の媒体ツールであります。このことは当院の糖尿病対話マップがUS Conversation Mapsとは全く異なることを示します。

糖尿病自己管理はまず自分の問題点に気づくことが重要です。糖尿病対話マップでは、「気づくことの大切さ」を9つの項目に分け、絵のなだらかな道に配置し目標まで導くマップに現しました。糖尿病対話マップ作成に至った背景は、医院開業当初から28年にわたって山田伊津子が待合室の壁に毎月掛け替えた小さな絵と言葉が患者さんにとって身近な存在であり対話マップの絵に繋がったと思います。

2006年、ヨーロッパでのTPE (Therapeutic Patient Education, 療養的患者教育) で糖尿病教育プログラムについてポスター発表をした際に、ジュネーブ大学医学部名誉教授でWHOの慢性疾患研究班の班長を長年務められたJean-Philippe Assal先生に出会いました。2010年にはAssal先生の教育研究所から招聘され糖尿病対話マップに関する検討会をスイスのグリメンツとジュネーブで4日間行い、対話マップの特性、文化的背景、芸術的側面、使用法などについて多角的に検討しました。Assal先生をはじめ検討会に参加した患者、医療者(医師・看護師・薬剤師)、教育学者、画家ら14名から「糖尿病を持つ患者がマップを見たとき、患者の経験・病気の状態・心の動きがマップに投影され気持ちが解放される」と評価されました。当院の糖尿病教育プログラムと糖尿病対話マップについては、日本糖尿病学会ばかりでなく海外の学会や研究会でも発表する努力を重ねてきました(2002-2012 USA-Japan Meeting, 2006 TPE Florence, 2006 IDF Cape Town, 2008 TPE Budapest, 2009 IDF Montreal)。

糖尿病対話マップとPictorial Representation of Illness and Self Measure (PRISM) を併用するというAssal先生の提案から、山田伊津子が2012年スイスのチューリッヒ大学精神医学教授Stefan Buchi先生(1999年PRISM創出)を訪ねPRISMの原理・考え方・使用法・評価法についてトレーニングを受けました。PRISMとは「A4大の白いボード上の右下に固定され直径7cmの黄色い円(患者自身; Self)があり直径5cmの赤い円(患者の疾病; Illness)を患者が自分の判断で配置しその時の感情・考え・状態を説明する。医療者は患者の言葉(ナラティブ)を記録し患者自身と疾病の距離(Self-Illness Separation; SIS)を測定することで客観的データを得られる」ツールです。糖尿病対話マップもPRISMも視覚的媒体という共通点があり、媒体を用いた糖尿病対話マップやPRISMは質問票を用いずにPatient Reported Outcome(患者自らの評価)を得ることができます。2013年メルボルンで開催されたIDFにおいてこれまでの成果をまとめた「Diabetes Dialogue Map and PRISM」を発表しました(Kenichi Yamada, Itsuko Yamada, Jean-Philippe Assal, Stefan Buchi, Tiziana Assal)。

今回のGuido Ruffino Prizeは私たちの指導者であるAssal先生、Buchi先生は勿論のこと当院医療スタッフ、教育研究所職員、当院の糖尿病を持つ患者さんと共にいただいたものです。今後も「ともに歩む医療」を継続していきたいと思います。

* 山田伊津子 Guido Ruffino Award でYouTube で閲覧できます。